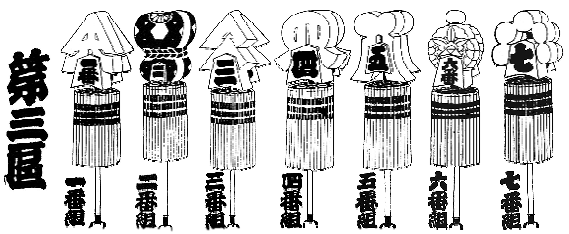
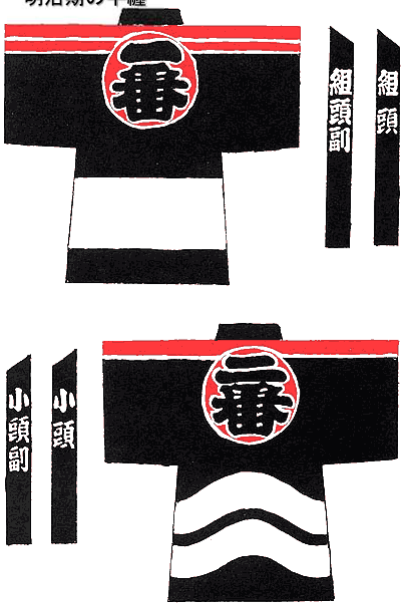
1657	最も大規模と言われている明暦3年(1657)の「明暦の大火(振袖火事とも言われる)」では、 山の手3箇所から出火し、強風に煽られ江戸の町大半に延焼が広がり、江戸城本丸、二の丸、天守閣もこの火事で焼失してしまいました。 すでに戦国時代は遠くさり、戦のない太平の時代に天守閣は不要の長物となっていたことから、 江戸城天守閣はこれ以降再建されることはありませんでした。明暦の大火における死者数は約10万7千人と言われています。 天和2年(1682)の「八百屋お七の火事」では、駒込大円寺から出火し、焼失した武家屋敷241,寺社95,死者数約830～3500、 元禄16年(1704)の「水戸様火事」では、小石川水戸屋敷から出火し、焼失した武家屋敷275,寺社75,町家20000,死者数は不明、 明和9年(1772)の「明和の大火」では、目黒行人坂大円寺から出火し、焼失した町数が904,死者数約14700、 文化3年(1806)の「文化の大火」では、芝車町から出火し、焼失した町数530,大名屋敷80,寺社80,死者数1200と言われています。
1718	享保三年(1718)になると、町奉行大岡忠相により各町名主に町火消の設置が命じられ、町人たちによる消防組織が作られた。これが町火消である。その二年後、火消組合が再編成され、隅田川から西の町をだいたい二十町ごと四十七の小組に分けて、いろは四十七文字を組み名とした。ただし、へ、ら、ひの三文字は語感が悪いという理由で除かれ、かわりに百、千、万とし、本所と深川は別に十六の組に分けられた。この時、各組の目印を纏や幟に定めたのである。
1730 1832	享保15年には、四十七の小組は一から十番組の大組に改正され、今度は大組一組ごとに大纏が与えられた。もともと纏は戦国時代に武将が戦場で敵味方を見分けるために目印としたのがルーツであり、火消の纏もだんだんとスタイルが変化している。大名火消などは当初幟を使っていたが、その後馬簾がついたものにかわった。町火消も結成当時は纏幟を使い、活動範囲町名を書いた幟と掟を書いた小旗を添えていたが、天保二年に現在の纏らしい馬簾付纏になり、後に飾りの大きさも二尺(60cm) 以内と定められた。当時の纏は現在のものよりも重く、現場で消し口の印として火事場に立つ纏持は、かなり危険な役割であった。それでも燃えさかる炎の中で纏を振る纏持の、その雄姿は見事だったそうだ。
1870	明治時代、町火消は東京府に移管され、東京府は明治3年(1870年)に消防局を置き、町火消を改組し消防組としました。
1872	明治5年からは、それまでの江戸町火消は6大区39組編成の“消防組”と改められ、明治7年に東京警視庁(後に警視庁と改称)が発足すると“消防章程”によって巡査屯所の所属となり、新たな警視庁消防組のスタートとなる。組頭、組頭副、小頭、小頭副、筒先、一等消防手、二等消防手、一等水防手、二等水防手と新しい縦列が決まり、それぞれの半纏(制服)も“服章規定”によって細かく決められ、デザインを一新して警視庁からの支給となった。頭取の半纏は、肩から左右の袖口まで赤筋が入り、頭取のなかでも組頭と副組頭は3寸幅と1寸幅の子持ちの赤筋、小頭と副小頭は3寸幅の赤筋1本と決められ、通称“赤筋半纏”と呼ばれ、私たちの先輩たちは“朱引きの半纏”といって大切にしていた。江戸御府内の朱引き内の言い方とおなじで、響きがよかったんだろうね。
1873	明治6年(1873年)に消防事務は内務省に移され、東京府下の消防は、翌明治7年(1873年)に新設された東京警視庁に移されたので、東京警視庁では、直ちに消防組に関する消防章程を制定しました。これが明治の消防の組織活動の基礎となりました。
1894	全国的には公設消防組は少なく、ほとんどが自治組織としての私設消防組であり、それも名だけというものが多かったのです。そこで、政府は社会の発展に即応する効率的な消防組織の育成を図るため、地方制度再編成を機会に、明治27年(1894年)に消防組規則(勅令第15号)を制定し、消防組を府県知事の管掌として全国的な統一を図りました。具体的な内容は、消防組は知事が職権をもって設置すべきもので、今までの既設の消防組を認めたり、また市町村が自ら組織したものを認可することではいけないという強硬な絶対的至上命令なもので、消防組は知事の警察権に掌握されながら、その費用は一切市町村で負担するべきものと規定されていました。規則施行後にも、消防組の設立は遅々として進まなかったものの、警察署長等の積極的な働きかけなどにより、大正時代末には飛躍的にその数が増大していくこととなりました。
1916	東京での出初式は大正5年(1916年)から1月6日の開催となった。昭和4年(1929年)1月6日の出初式は宮城前広場(現在の皇居前広場)に特設消防隊と全国消防組が集結し、昭和天皇臨席のもとに親閲式として行われている。昭和14年(1939年)、現在の消防団の前身となる警防団が誕生。警防団は戦争に備えて防空や水火消防を担当することとなり、消防組は警防団に吸収されてその役割を終えた。東京での出初式は昭和15年(1940年)から**帝都消防検閲式**と改称され、1月15日に代々木練兵場で開催されることとなった。帝都消防検閲式は模擬火災に焼夷弾を使用するなど、戦時色が濃厚であった。昭和20年・21年(1945年・46年)の出初式は戦争の影響で行われず戦後初となる出初式は名称を**帝都消防出初式**と改め、昭和22年(1947年)1月15日に開催された。
1929	昭和4、5年(1929、30年)頃から、軍部の指導により、民間防空団体として防護団が各地に結成されました。昭和13年(1938年)に内務次官名で消防組、防護団の統一について両団体統合要綱案が通牒され、勅令制定の基礎となる両団体統合の要綱が決定されました。昭和12年(1937年)には防空法が制定され、国際情勢が悪化してゆく中、国防体制の整備が急がれるようになりました。これらを経て、消防団と防護団を統合し新たな警防組織を設けるため、昭和14年(1939年)1月に勅令をもって「警防団令」を公布しました。これにより、明治以来の消防組は解消し、警防団として同年4月1日に全国一斉に発足され、警察の補助機関として従来の水火消防業務に防空の任務を加えられて終戦に至りました。
1939	歴史の中で、町火消はどのような役割を果たしてきたのか。江戸時代、町火消は奉行所が管轄し、約1万人いたという。江戸城に火災が及ばないよう、四谷や赤坂、半蔵門、浅草などの見附を結んだ江戸市中を管理していた。明治になると警視庁の直轄となり、市部消防組と呼ばれるようになる。昭和14年(1939年)からは警防団として空襲下の救助活動を担い、昭和22年(1947年)に消防団令が発令されて、消防庁が誕生。現在の消防署ができた。警防団令が発令された昭和14年(1939年)に江戸町火消の制度もなくなったことから、半纏や纏、木遣りや梯子乗りなどの技を残すために江戸消防記念会が発足したという。
	その後、時代とともに梯子乗りに当初の役割はなくなりましたが、人に見せる伝統芸能として保存されてきました。現在は、1月6日頃の出初式と、5月25日の消防殉職者慰霊祭で披露されています。

鳶職の町火消としての役割からは明治維新の制度変更により外れることとなりましたが、「木遣り」「梯子乗り」「纏振り」と言った伝統技芸は代々伝承され、現在は鳶職の頭で構成される社団法人江戸消防記念会が保存事業として運営しています。



万組　籠目菊花 く組　四谷に駒形 お組　下り藤に駒形
矢じりに駒形 ま組　駒に重ね山形る組　琴柱(ことじ)の組　千成駒形

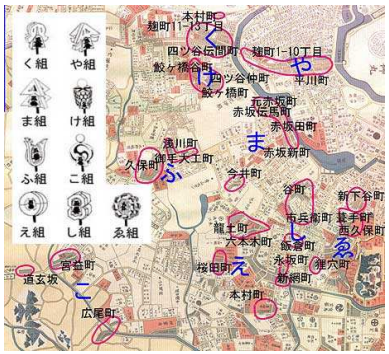
明治期の半纏



大正５年製　刺子半纏（宮田家所蔵）

第三大区　四番組

小頭副



江戸町火消		江戸消防記念会	
大組	小組	大区	番組
一番組	い組	第一区	二番組
二番組	ろ組	第一区	三番組
一番組	は組	第一区	八番組
一番組	に組	第一区	七番組
八番組	ほ組	第五区	一番組
十番組	と組	第五区	三番組
十番組	ち組	第五区	四番組
十番組	り組		
十番組	ぬ組	第五区	六番組
十番組	る組	第十区	九番組
十番組	を組	第五区	三番組
八番組	わ組	第五区	五番組
八番組	か(加)組	第五区	二番組
一番組	よ組	第一区	一番組
八番組	た組	第四区	一番組
九番組	れ組	第五区	七番組
九番組	そ組		
九番組	つ組	第四区	三番組
九番組	ね組	第四区	九番組
六番組	な組	第四区	二番組
六番組	む組	第四区	七番組
六番組	う組	第四区	四番組
六番組	ゐ組	第三区	五番組
六番組	の組	第三区	七番組
六番組	お(於)組	第三区	六番組
五番組	く組	第三区	四番組
五番組	や組	第三区	一番組
五番組	ま組	第三区	三番組
五番組	け組		
五番組	ふ組		
五番組	こ組		
五番組	え(江)組	第八区	四番組

江戸町火消		江戸消防記念会	
	小組	大区	番組
三番組	て組	第八区	一番組
三番組	あ組	第二区	六番組
三番組	さ組	第二区	四番組
三番組	き組	第二区	五番組
三番組	本組		
三番組	ゆ組		
二番組	め組	第二区	一番組
三番組	み組	第二区	二番組
五番組	し組		
五番組	ゑ組	第二区	三番組
二番組	も組	第一区	五番組
二番組	せ組	第一区	四番組
二番組	す組	第一区	六番組
二番組	ひ組	第一区	九番組
二番組	千組	第一区	十番組
一番組	万組	第三区	二番組
南組	一組	第六区	二番組
南組	二組	第六区	一番組
南組	三組	第六区	一番組
南組	四組	第六区	二番組
中組	五組	第六区	二番組
南組	六組	第六区	二番組
中組	七組	第六区	三番組
中組	八組	第六区	三番組
中組	九組	第六区	九番組
中組	十組	第六区	四番組
北組	十一組	第六区	五番組
北組	十二組	第六区	五番組
北組	十三組	第六区	五番組
北組	十四組	第六区	五番組
北組	十五組	第六区	五番組
中組	十六組	第六区	四番組

五番組		
く組	四ッ谷伝馬町、麹町十一丁目より十三丁目迄、市ヶ谷本村町	人足187人
や組	半蔵門外、麹町辺、同三丁目裏、平河町	人足117人
ま組	赤坂伝馬町、赤坂新町、赤坂田町、元赤坂町、麻布今井町	人足285人
け組	元鮫ヶ橋町、鮫ヶ橋谷町、四ッ谷仲町	人足111人
ふ組	青山御手大工町、青山御出浅河町、青山久保町	人足100人
こ組	麻布宮益町、麻布道玄坂町、渋谷広尾町	人足 35人
え組	飯倉六本木町、麻布龍土町、本村町、桜田町	人足144人
し組	麻布市兵衛町、谷町、飯倉町、麻布新網町、永坂	人足132人
ゑ組	西久保町、新下谷町、西久保宜手町、狸穴町	人足226人